

## 弥生時代から古墳時代へ

### 1. 弥生時代から古墳時代への変化

3世紀の中ごろ奈良県桜井市に<sup>はしはかこふん</sup>箸墓古墳（墳丘長約280m）が築造されました。同じ頃、福岡県苅田町に<sup>いしつかやまこふん</sup>石塚山古墳（墳丘長約120m）、岡山市に<sup>うらまぢやうすづか</sup>浦間茶臼塚古墳（墳丘長138m）などの<sup>ぜんぼつこうえんふん</sup>前方後円墳が築造されました。これらの古墳は墳形、<sup>はにわ</sup>埴輪等に箸墓古墳との共通点が見られる一方、墳丘規模では大きな隔絶があります。このことは、箸墓古墳のある<sup>きない</sup>畿内を中心とする同盟関係が成立したことを示しており、新たな時代：古墳時代の幕開けを示すものといえます。

古墳は東北北部を除く本州・四国・九州の各地に築かれるようになり、後のわが国の基礎となるような連合体が構成されたことを示しており、モノの流通も広範囲に行われるようになりました。

古墳に見られるように東北地方から九州地方にかけて見られる連合体の構成と、隔絶された権力者の出現や階層性、共通した文化の伝播が弥生時代から古墳時代への大きな社会の変化を表しています。



前方後円墳（八代大塚古墳：6世紀）

### 2. 弥生土器から土師器へ

土師器は古墳時代～平安時代（3世紀後半～12世紀）に作られた<sup>なんしつ</sup>軟質、<sup>すやき</sup>素焼の土器です。

初期の土師器は器形の組み合わせや、成形にろくろを使わないこと、<sup>しょうせい</sup>焼成に<sup>かま</sup>窯を用いないことなど、多くの点で<sup>やよいどき</sup>弥生土器の延長上にあります。

しかし、①<sup>たいど</sup>胎土が<sup>せいりょう</sup>精良になる。②<sup>かめ</sup>甕の内面を削り込み薄く仕上げられている。③<sup>さいしやう</sup>祭祀用の土師器はデザインの地域性が薄れる。等の弥生土器との違いが指摘されています。

とはいえ、弥生土器と土師器の間に明確な線引きは無く、弥生時代終末の土器とするか土師器とするかの判断は研究者の間で意見の相違が見られます。



土師器（高島古墳群出土：4世紀）

### 3. 方形周溝墓

方形周溝墓は弥生時代から古墳時代に造られた周りを溝で囲まれたお墓です。墳丘もあつたと考えられますが、ほとんどの場合、墳丘は削られ、周溝だけが残っています。1基の周溝墓には溝の中も含めて数人が埋葬され、世帯単位で造られた墓と考えられます。規模の違いは世帯間の優劣などの社会構造が反映されたものとみられ、造墓数が減少するとともに1基あたりの埋葬数も減少し、限られた有力者の墓としての性質が強まりました。

現在の新八代駅周辺には、弥生時代の終わりから古墳時代の初めごろ（3世紀）まで方形周溝墓が築かれました。圃場整備のため上部は削られています。周辺には塚が多数あり、塚を壊した際には石櫃・剣等が出土したと伝えられています。このことから、1基あたりの埋葬数は不明ながら、墳丘を持ち、石櫃を内部主体とし、副葬品を持つものがあつたと考えられます。



方形周溝墓（用七遺跡：3世紀）

### 4. 鉄器の変化

剣は先端が尖り、両側辺に刃を付けた刺殺用の武器です。刀は細長い身の一側辺を刃とし、振り下ろして使用する切断具です。刀は身の長さによって刀子・短刀・小刀・大刀などの呼び分けがありますが厳密な区分はありません。

日本列島には弥生時代に朝鮮半島から銅剣や石剣が伝わり、戦闘用の武器として使われました。弥生時代中期には青銅製の剣は祭器となり、鉄剣が実用の武器として使われるようになります。その後、古墳時代になると、鉄製の大刀が実用の武器として使われるようになります。さらに古墳時代後期（6世紀）には大陸系の儀仗大刀が流行し、祭器としての鉄剣も姿を消していきました。その後も日本では大刀が武器として発展し、鞘や柄を飾るだけでなく、刀身の美しさも追及されていきます。



鉄剣（大鼠蔵楠木山古墳出土：4世紀）